



「地球の島めぐり 南極点への旅」を振り返る

寄稿 旅の鉄人・池内嘉正さん

とまるで「旅のオリンピック」だ。今の世界情勢では考えられない個性豊かな旅の達人たちと共に過ごした1週間のクルーズだった。

ドレーク海峡を飛行機で飛び越え着いたところがどこか解らず、ただひたすらに海岸方向へ歩を進めた。歩き慣れない雪道で、気温は0度と言うのに全身汗びっしょり。南極と聞いて今まで着た事も無い防寒衣を身に着けているからだ。頑強なゴムボートに乗り込み本船へと移動、キングジョージ島から出航した。南アメリカ大陸から一番近いアルドレイ島には各国の観測基地がひしめいている。

南極7日間クルーズ キングジョージ島へ

チリ南部の都市、プンタ・アレナスのホテルで南極クルーズの出発を知らせる電話を待った。そしてついに、その電話が来た。

2000トンの船で行く南極クルーズは乗客25名。スペイン・イタリア・オランダ・ドイツ・ニュージーランド・ギリシャ・オーストリア・イギリス・イスラエル・アメリカ・ロシア・日本人2人（私と妻の「小鉄」

乗船後に行われたクルージングのレクチャーは英語とスペイン語の説明は、解かったような解からんような。しかし各国の旅の猛者に負ける訳にはいきません。

海上にはツララが下がった下迫力の氷山が浮かぶ。気温はマイナス5度。雪がチラつき始め、素手での写真撮影は指先が痛く限界を感じる。朝5時、いよいよアルドレイ島へ

東神楽、大阪、石垣島での3拠点生活を続ける池内嘉正さん。「旅の鉄人」として7年間にわたり続けた「地球島めぐり70島」のフィナーレで2009年に訪れたのが南極点だった。それから15年が経過したいま、「南緯90度」への旅を改めて振り返る。（写真はいずれも池内さん撮影）。

ギンたちがヨチヨチと歩く姿に思わず笑みがこぼれた。「私の元氣な内に孫達にも南極を見せてやりたい」と思う。

2日目にして南極の壮大さに目を見開き口も聞けない大迫力。冰山や氷塊が浮遊する間を注意深くボートが進む。100メートル先の氷山の上にアザラシを見つけた氷の壁に阻まれる。世界中を旅して冰山・流水・氷河を数多く見てきたが、大きさは比べものにならない。毎日変わる氷雪の絵画、氷塊は大きく動き変幻自在の大迫力。冰山から下がっているツララを手に取り味を確かめると、海水を被っているのと塩味がした。

クルーズの最終日、悪天候で海は荒れ狂い立つてはいられないほどの揺

ペンギンの姿に心が和む



で、船内放送で夕焼けのアナウンスを聞いた旅仲間が続々と現れた。私は一足先に船室に戻る。冷えた身体にはホットウイスキーが一番。延泊と南極海の夕日は悪天候のお陰だった。

その日は夜の更けるまで飲んで踊って、世界中の仲間と別れを惜しんだ。仲間たちの中には、ロシア人やイスラエル人も。どちらの国もいま戦争の最中だが、いつか平和が戻り、心置きなく旅行が楽しめる日が戻ってくることを願わずにはいられない。

南米最南端 ナパリーノ島へ

クルーズを終えてブタ・アレナスに戻ってから、今度は飛行機に4時間乗り、南米の最南端にあるナパリーノ島を訪

れた。「日本人の観光客は初めて」と、島にたった一軒のホテルの支配人「ミスター・モーリス」が大歓迎を受ける。年中強風が吹き荒れる島の厳しい自然環境も、私たちが訪れた5日間は太陽が時々顔を出してくれた。モーリスはカメラが趣味で、バードウォーチングと森の撮影のガイド役を連日務めてくれた。島の特産物、キングクラブの食べ歩きはお陰でどこへ行っても歓迎された。ここではしか食べられない安くて美味しい蟹三昧に連日、舌鼓を打った。

最果ての島の小学校

を訪問したところ、偶然にも修業

式の当日であった。式に参列し小学校運営資金に協力を

南氷洋の荒波を乗り越えて進む



申し出て、少しは役に立ったようだ。

ナパリーノ島から帰った翌日、「空港へ集合」の電話が鳴った。待ちに待った南極大陸訪問がようやく実現する。重装備

ロシアからの旅行者とダンス



れとなった。港にも着岸出来ないので早めに就寝した。22時過ぎにトイレに立つと、窓の外がピンク色に染まりかけていた。慌ててパーカーを着込みデッキに飛び出す。おっ！寒い。空がどんどんと焼けていく。初めての南極海の夕焼け。ピンクに染まる白銀の世界に心が躍り、我を忘れてシヤターの音を重ねた。デッキは私ひとり独占。撮影を一通り終えたころ

白夜が南極をピンクに染めた



クルーズ仲間たちとの出会いに感謝



の冬支度を整え、ロシア製の輸送機で4時間のフライト後、南極大陸にある「パトリオットヒルズ」の大氷原の滑走路に着陸した。地平線まで続く白雪の滑走路に度肝を抜かれ、初めて見る光景に大きく目を見開いた。タラップを降りると、サングラス無しではまぶし過ぎる白雪の世界だった。わあ！凄いとこころへ来たものだ。夢が現実となった瞬間、胸が高鳴りその場に立ち尽くす。

やがて一歩一歩とパトリオットヒルズの基地へと歩を進める。しかし、ここは南極点へ行くための単なる中継地点だ。氷雪上のテントにチェックイン。フロモシヤワも無い1週間のキャンプ生活が始まる。事前に聞いていた基地についての情報は最悪だったが、飛行機は年々設備が良くなり、今年から新しいトイレも設置されておりホッとす。氷点下のテントで着の身着の

まま状態で過ごすのが、乾燥地帯では身体もあまり汚れない。テントでも朝までぐっすり眠れる「三ツ星ホテル」で全てが快適に暮らせた。

南極の夏は一日中太陽が沈まず、昼も夜もない。一番気になる食料は氷の地下室の冷凍庫（マイナス22度）に貯蔵されている。何でも揃う南極は順調すぎて物足りない。南極の説明を受けたり、各国からの旅行者とゲームで交流したりして、暇なんて全くない3日間を過ごしたが、南極点行きはすべてが天候次第で、「ゴースサイン」はまだ出ない。

無菌状態の基地では皆が手の消毒に万全を期している。10年後のコロナ禍以上の入念な消毒と自己管理をしながらの共同生活に、各国の人達との連帯感が生まれた。

調理師の資格を持つ私は腕によりをかけて料理



氷点下でもぐっすり眠れる「三ツ星ホテル」



調理師の腕を活かし料理をふるまった

をふるまうことになり、食料庫からスモークサーモンとカレーの材料を調達して、夕食に寿司とカレーをそれぞれ50人前をこしらえて、旅仲間とスタンプをもてなした。翌朝にはあちこちから「YOSHII」と声が掛かり、パトリオットヒルズでの時間をより快適に楽しめた。

こうして旅行ができるのはスタンプのおかげ。人間の縁とは本当に不思議なもので、パトリオットヒルズのスタッフには、2002年の北極点の船旅で出会った、大阪出身アラスカ在住の日本人男性、舟津圭三氏も加わっており、7年ぶりに再会した。犬ぞりレーサー、冒険家としても知られる舟津氏は、いま北海道余市の仁木ヒルズ・ワイナリーの総支配人を務めている。

南極点は氷点下26度 標高3000メートル

南極点は天候が厳しく、1週間の中で気象状況を見ながらフライトすることになる。いつ出発する

アムンゼン・スコット基地は「南極銀座」のよう



どこまでも広がる大氷雪原



のか全く解らない。

ようやくその日が来た。ダグラスが戦前に作ったプロペラ旅客機DC3に乗って往復11時間の強行軍で、標高3000メートル、気温マイナス26度の南極点に到着した。酸素が薄いためか、機外に一步踏み出したところクワックと来た。それでも南極点に掲げられた日本国旗に勇気付けられた。数多くの冒険家たちが命をかけて目指した人類初の南極点到達をノルウェーの探検家ロアル・ア

ムンゼンが成し遂げたのは1911年のこと。それから約百年後、南極点に降り立ったことに感動、感激した。

南極点は「へき地」ではない。医者も通訳も同行し、スタッフは万全。目の前の近代的な建物は2008年に建設されたアメリカのアムンゼン・スコット基地がある。シヨッピングモールか「南極銀座」のようだ。

しかし、屋外に一步出れば環境は厳しい。青空が広がり風もなく写真撮

影には最高だったが、シ

ャッターを押す指の感覚は麻痺、ゴーグルは氷結し目の前が見えない。日本人参加者6名で記念の

写真をとと思うのだが、酸欠状態になり時々「フラック」とくる。休息室で酸素吸入を受ける人もいた。しかし、これほど過酷な環境だからこそ、人間が最後に行ってみたいのはやはり南極ではなからうかと感じた。

どこまでも広がる氷雪原が光り輝く様を目の当たりすると、「ここまで来て良かった」との念に

駆られる。人それぞれ生き方は違うが、未知への好奇心と冒険は年齢を超越しても同じである。

プンタ・アレナスのホテルで知り合った旅仲間の中に御歳90歳(当時)の女性、川瀬みどりさんがいる。好奇心を持ち続ける川瀬さんを思えば、南極に一回来ただけでは、

川瀬みどりさんとの出会いが大きな刺激となった



(帰国後の「同窓会」で、右が池内さん、左が川瀬さん)

驚くほどでもない。南極は、これからの未知への旅の通過点。これからの旅行を続けるためにも、健康で長生きせなあきまへん。

愚痴もこぼさず旅の思い出を共有できた女房の「小鉄」、留守を預かってくれた家族、旅で出会った多くの人、自然の恵みにも改めて、おおききにの思いを抱きながら、好奇心はますます膨らんでいる。(池内さんの旅行についての情報は「地球島めぐり tetujin60.com」でウェブ検索。)

